

失題しつだい（古莊嘉門ふるしょうかもん）

才子さいし 元來がんらい 多おほく 事ことを 過あやまる

議論ぎろん 畢竟ひつきよう 世よに 功こう 無なし

誰たれか 知しらん 黙もくもく々 不ふげん言げんの 裡うち

山やまは 是これ 青せいせい々 花はなは 是これ 紅くれないないなり

才子元來多過事 議論畢竟世無功
誰知默默不言裡 山是青青花是紅

解説 才子のことを述べた詩。

語釈 ※才子Ⅱ利発な人。余りよい意味で用いていない。※多Ⅱ多くの場合。※過Ⅱ失敗すること。※議論Ⅱ才子のする議論。※畢竟Ⅱつまり、結局。※世無功Ⅱ世の申に貢献するところがない。益するところがない。※誰知Ⅱ反語。くということを知ろう。（誰も知るまい、実はそうなんだ。の意）※不言裡Ⅱ無言のうちに。

通釈 才子というものは、とかく物事にしくじりがちなものである。才を待たんで議論のための議論をするために、議論だ斃おれになつて、己には何の利益ももたらさず、世の申にも何ら貢献するところがないからである。誰が知ろう、天は物言わずして、しかも、大自然の運行を主宰して、山は必ず青々と茂らせ、花は必ず紅く咲かせていることを。